

古市公威と土木学会の設立

金 関 義 則*

1.

大正3年(1914年)9月15日、築地の精養軒で土木学会発起人総会が行われ、定款、規則を原案どおり可決したあと、役員選挙によって会長に古市公威、副会長に沖野忠雄、野村龍太郎、常議員に石黒五十二、中山秀三郎、日下部弁二郎、古川阪次郎、近藤虎五郎、白石直治、広井勇、仙石貢を選出した。さらに、11月24日に文部省が社団法人として土木学会の設立を許可し、12月7日に東京区裁判所で法人設立登記が完了した。

このようにして土木学会は発足したわけであるが、上記総会に先だてて5月29日から31日にかけて、下記のような設立趣意書が定款、規則の草案を添えて600余名の土木工学者あてに発送された。

土木学会設立趣意書

泰西諸國ノ工學界ヲ觀ルニ各専門家ハ競フテ 斯学ノ研鑽ニ從事シ孜々トシテ倦マス 各自研究実験ノ成績ヲ 発表討論スルノ機関トシテハ則チ学会ヲ興シ 刊行物ヲ頒布シ 恒ニ斯学ノ進歩発展ヲ怠ラサルヲ期ス 斯学現時ノ隆盛ヲ致セル 蓋シ偶然ニアラサルナリ而シテ 我國ニ於テモ現ニ 機械、電氣、建築等ノ如キ既ニ各専門ノ学会ヲ設立シ 研鑽ヲ怠ラサルハ 我工學界ノ為メ賀ス可キナリ然ルニ 吾人専攻ノ土木学科ニ至リテハ 學界其人ニ乏シカラス事業亦尠ナラサルニ拘ラス 今日ニ至ルマテ 未タ土木学会ノ設立ヲ見ルヲ得サリシハ 誠ニ遺憾ノ極ニシテ亦 工學界ノ一欠

* 正会員 科学史家

点ナラストセス 仍テ吾人茲ニ土木学会ヲ設立シ 会誌ヲ刊行シ 研究討論ノ途ヲ開キ 汎ク意見ヲ交換シ 以テ土木工学ノ進歩及土木事業ノ発達ニ資センコトヲ期ス

この趣意書にあるように、「土木工学者も土木事業も増えたのに土木学会が設立されていないのは困ったことである。機械、電氣、建築などの学会はすでに発足して成果をあげているではないか」と残念がったのは、当然至極であった。しかも1914年まで、おくらせてしまったのはなぜであろう。土木工学の長老が、土木学会が発足することによって土木工学者が工学会から続々退会しては大変であると、考えたからである。特に長老である古市公威は工学会の副会長であり、老衰した会長の山尾胤三に代わって会務を執行していたからである。もともと工学会は明治12年(1879年)に、工部大学校の卒業生が、工部省と工部大学校とを築きあげた山尾胤三を会長にかついで、結成した学会であった。最初の会員は23名であったが、工学関係の最初の学会であり、工学のすべての部門の専門家に参加を呼びかけたので会員はだんだんに増加した。工部省が明治18年に廃止され、工部大学校が19年に東京大学工芸学部へ併合され帝国大学工科大学が発足したのちも、工学会は大日本帝国の工学、工業、工芸の進歩をめざして、富国強兵、殖産興業の初志を守ったのであった。しかしながら、明治18年に日本鉱業会、19年に造家学会(のちの建築学会)、21年に電氣学会、30年に造船協会、機械学会、31年に工業化

学会が創立するにつれ、新しい入会者は減り、退会者が増えるという傾向が現われた。土木学会が設立されて、工学会から土木工学者が退会したら、工学会がやせ細り存立が危ぶまれることは、必至であった。

土木工学の長老のためらいをはねかえして、土木学会設立を推進したのは、東京帝国大学の土木工学科の教授であった中島鋭治、広井勇、中山秀三郎であった。たまたま 1854 年に生まれた古市公威、神野忠雄の還暦記念の資金募集が計画されていた。古市も神野も、封建的な親分子分関係の祝賀事業を好まなかったため、この機会に土木学会を設立しようと古市を説得した。そうして古市を設立運動の先頭に推して、集まった還暦記念募金は古市、神野の指示に従って土木学会に寄付され、基金となった。すなわち、土木工学界に長く貢献した古市、神野の功績を記念する事業の代わりに、土木学会が発足したような結果になった。しかも選挙によって第 1 代の会長に古市公威が当選し、第 2 代会長に神野忠雄が当選したから、まずはめでたい発足ということができよう。

2.

土木学会が発足してみると、案じられたように工学会は会員数が減り、機関誌の内容も迫力に乏しいものになっていった。大正 6 年には山尾庸三が亡くなるが、没前に古市公威は工学会の会長になった。古市はいやおうなく、新しい工学会の進路を開拓せねばならなくなった。ついに大正 11 年に工学会は改組された。すなわち工学会は個人会員をもたず、日本鉱業会、日本鉄鋼協会、土木学会、造船協会、建築学会、電気学会、火兵学会、暖房冷房協会、工業化学会、電信電話学会、機械学会、照明学会といった 12 の学会（法人もしくは、その代表者）からなる総合学会となり、会長は理事長と改められた。古市は引き続き理事長となり、昭和 9 年に病没するまで会務につくしたのであった。工学関係の個々の学会が活動するほかに、学会の境界を越えて活動すべきことがあることを古市は確信して工学会を守ったのであった。古市は明治 31 年に内務省技監兼土木局長をも、東京帝国大学工科大学教授兼工科大学長をも辞任し、土木学会の会長を 1 年間だけ勤めたのに引きかえ、工学会に対しては明治 20 年に入会して幹事となって以来、約 46 年もの長い期間にわたって、心を砕いたのであった。古市が広い視野にたつて工学会を指導したということは、取りもなおさず全国の工学者を背景にして、きわめて強い発言権をもっていたということである。

古市公威が日本の工学、工業に大きく寄与したことは何よりも古市の卓抜な能力、識見によるものであるが、能力、識見を高く評価して古市を思う存分に働かせたの

は山県有朋であった。このことは別の機会に述べたので繰り返さないが、古市は長州出身者ではないが、長州閥にかかえ込まれ活動したのである。

古市公威は明治 3 年（1870 年）姫路藩の貢進生として大学南校に入り、8 年に東京開成学校諸芸学科の予科 1 年生のとき、文部省の第 1 回留学生として選抜されフランスに渡った。非常に優秀な成績でエコール・サントラルを卒業し、さらにソルボンヌ大学理科で数学、天文学を学習して 13 年に帰国した。そして内務省土木局に入ったが、長州出身の内務卿、山田顕義、山県有朋から早くも矚目された。明治 19 年に帝国大学が発足したとき、古市は工科大学長に任命され、伝統の異なる東京大学工芸学部と工部大学校とを統一するという大役を仰せつかった。これは大学南校から東京開成学校にかけて、教師の立場から古市の将来に期待をかけていた浜尾新の懇望によるものであった。古市はフランス留学に先だって、フランス人教師のマイヨから、エコール・サントラルを優秀な成績で卒業すること、帰国して日本にエコール・サントラルに負けない大学をつくることを、宿題として与えられていた。したがって古市は工科大学長に専念するため、内務省土木局を辞任すべきであったが、内務大臣の山県有朋は許さず、土木局を本務とし工科大学を兼務とすることになった。さらに明治 21 年 11 月から翌年 9 月にかけて山県がヨーロッパに出張するとき、フランスもしくはドイツ留学の経験のある陸軍省、内務省の秀才を選んで随員としたとき、古市が首席随員となったことは特筆大書すべきであろう。このときの山県の任務は、憲法制定、国会開設に備えて地方自治の体制を確立すること、日清戦争に備えてヨーロッパの軍事情勢を把握することとであった。山県のヨーロッパ出張は所期の成果をあげただけでなく、古市が非常に有能な秀才であることを山県に強く印象づけた。帰国の翌年 6 月に土木局長に抜擢され、同年 9 月に最初の勅選議員として貴族院に送り込まれたことは、山県の信任あつての破格の人事というべきであろう。日清戦争に第一軍司令官として出征した山県有朋は明治天皇に奉った意見書で、朝鮮を南北に貫く釜山＝義州鉄道は東アジアへ通じる幹線であり、これを建設し延長して中国、インドに達する幹線を確保しないと、帝国主義列強と東アジアの覇権を争うことは不可能になるであろうと、述べている。このような山県の意見を、古市はヨーロッパ出張のときから理解していたと考えられる。日露開戦の緊迫を察して、明治 31 年に古市は内務省、帝国大学を辞任した気持を浜尾新もよくは飲み込めなかったようである。浜尾は古市が、やがて帝国大学の学長、文部大臣になることを期待しただけに、残念がった。菊池大麓、山川健次郎が硬い態度で、学長なり文部大臣なりの職責を全うできな

ったのに対し、軟らかい態度で自由に人材を使いこなす古市を、唯一の後継者として確保しておきたかったのである。古市はむしろ帝国大学の学長や文部大臣などになりたくはなかった。日清戦争、日露戦争に負けてはならない一念が終始一貫していたと、私は見たいのである。

明治 37 年から 40 年にかけて、古市公威が朝鮮に出かけ幹線鉄道の速成、改良を剛頭指揮した気持は、立身出世や昇給賞与に心うばわれる俗物には飲み込めないであろう。日露戦争の論功行賞で勲三等から勲一等への昇叙は、古市の功績にふさわしいものであったかどうか。かつて古市より下位にあり、古市の推薦によって抜擢された後藤新平（台湾民政長官）、中村雄次郎（陸軍中将、製鉄所長官）などが、そのときの論功行賞で男爵となっているのである。総理大臣の原敬の反対を押しきって、山県が古市への授爵を強行するのは、それから 13 年もおくれた大正 8 年のことである。明治 39 年に男爵になれなかったとき、古市はむしろさばさばした気持であった。山県の懸案であった釜山＝義州鉄道が完成しただけでも結構で、戦争が収まれば鉄道は朝鮮の官民にも役立つと考え、無事帰国できたことに心から満足していた。

京城で統監府鉄道管理局長官として、統監の伊藤博文とともに過ごした期間は短かったけれど、古市には忘れることのできない思い出となった。そのころ陸軍大将の長谷川好道が韓国駐劄軍司令官として威張りちらして官民から蛇蝎のように嫌われていたが、伊藤はいつも抑えつけて「おい長谷川、こうしろ」と厳命し、古市の仕事については信じきって「古市さん、大変でしょう」と優しく語りかけた。山県有朋の命令で長谷川が動くことを封ずるため、特に天皇の大権によって伊藤は元帥の資格で統監となっていたのである。このような法的な手続きがなくても、長谷川のような不束な後輩が長州閥の巨頭である伊藤に対抗できる見込みはなかった。その伊藤は諷れて 2 年ほどで、朝鮮の愛国者によって射殺された。

3.

大正 2 年から 3 年にかけて、古市公威は土木学会の創立を決断するようになった。古市の脳中をしきりと去来するものがあつた。文久 3 年（1863 年）に長州藩の伊藤博文、井上馨、井上勝、山尾庸三、遠藤謙助が国禁を犯してイギリスに密航した。長州の攘夷政策をこらしめるためイギリス、フランス、オランダ、アメリカの連合艦隊が下関を砲撃したので、伊藤博文、井上馨は滞英半年で帰国したが、あとの 3 名はロンドン大学を卒業し、それぞれ殖産興業の学問、技術を修得して明治元年に帰国した。すでに先着の伊藤、井上は明治維新の動乱に活躍して、新政の先頭になっていた。井上勝は鉄道寮、鉄

道局で、遠藤は造幣局で草創の仕事を展開するが、伊藤と山尾は工部省、工部大学校の整備に没頭した。工部省は殖産興業という国是の中軸ともいべき官庁であり、工部大学校はそのころスイスのチューリヒ工科大学とともに世界で最も進んだ工科大学として高く評価された。古市は明治 8 年から 13 年にかけてフランスで勉学したが、そのころは守旧派の征韓論が制圧され、殖産興業の政策が促進されるという変革期であった。伊藤博文、山尾庸三の活躍を信ずることができたからこそ、古市は迷うことなく勉学に没頭することができたのではなかったか。過ぎ去った明治前期をしのぶにつけて、伊藤が暗殺され、山尾が病気で衰弱しつつあるいま、工学会が発足したときの初心を守るのには、古市に残された責務ではないか。明治 27 年に清國との宣戦の詔勅が下されたときも工学会の会員は學術技芸をもって軍國の事に従うのが本分であるとし、古市は陸海軍に対し工学会をあげて粉骨砕身することを誓っていた。

大正 5 年 1 月の土木学会総会で、古市公威は会長講演の題目として戦争と技術者の役割を選んだのは、決して偶然ではなかった。古市はフランスに学び、フランスの風物と学問とを愛し懐しみつつも、普仏戦争、第一次大戦におけるフランスの臨戦体制を非難した。これからの戦争は、いよいよもって総力戦になるであろう、技術者はいまから覚悟して大戦に備えねばならないと、訴えているのである²⁾。古市が工学会理事長のほかにも、理化学研究所、學術研究会などにも異常な熱意を注いだことは、もはや詳説を必要としないであろう。土木学会は古市が格別の心配をしなくても、すくすくと発展していった。そうして満州事変が起こり、戦局が拡大しかけるときに古市は 80 年の生涯を閉じた。

土木学会、工学会を中心として、古市公威の没後にその偉業を記念する事業が実施された。1937 年 6 月に東京帝国大学構内に銅像が完成し、同年 7 月に伝記が印刷され配布された。古市の銅像は浜尾新の銅像とともに巨大で、構内でも最も好い場所を占めていた。銅像がすえられたとき、古市や浜尾がどんな人物であったか、もはや帝国大学の秀才たちにはわからなくなっていた。まして浜尾が若くしてフランス語を学び豊岡藩に洋式軍隊を整備しようとしたことも、古市もそれに近い状況で姫路藩の貢進生に選ばれたことも、未来論やゴルフに興ずる紳士にとっては、過ぎ去った夢のまた夢なのであろう。

参考文献

- 1) 金岡義則：古市公威の偉さ、『みすず』、みすず書房、1974 年 6 月、7 月。
- 2) 日本科学史学会（金岡義則・田辺員人・原田勝正）編：日本科学技術史大系・18 土木技術、第一法規出版会社、1970 年。

シンポジウム：近代土木技術の黎明期を探る

〈その1 古市公威 予稿集〉

昭和51年11月30日

社団法人 土木学会

日本土木史研究委員会

日本の近代工学史における古市公威

村松 貞次郎*

古市公威(1854~1934)の81才の生涯は多彩・充実、とてもにわかにはその全体像を把握することは困難である。特に工学史に限定しても学問とその応用の境界が分明でないため“群盲”に非らず“孤盲”象を撫でる“感を深くした。参考資料としては、やはり最終的に「古市公威」(故古市男爵記念事業会、代表真野文二著、昭和12年7月発行)に拠らざるを得なかった。

それを前にして呻吟したが、茫洋としてつかむところが見つからない。ただ一点、その書中にヒントらしき叙述を掴んだ。それは同書の第3章履歴中の第1節官歴に、あるいは何気なく述べられていた以下のような叙述であった(p.34~35)。

「而して先生嘗て人に語って曰く、余は学者に非ず、実業家に非ず、技術者に非ず、又行政家に非ず、色彩極めて分明ならざる鶴的人間と称すべきかと。又曰く、学者本来の希望するところは其専門を以て終始を一貫するにありと雖、余の如く諸種の方面に関係するを餘儀なからしめたるは蓋し時代の然らしむる所なりと。先生の此言、其の功を誇らざるに出づるも、事實は之を立証するに餘りありて、到る処可ならざるなく、向ふ所適せざるなく、具眼者は皆先生の学者たり技術者としての最高権威者たる以外、更に行政的識見と経綸的才能とを嘆称したり。」

その後半の著者の言葉には、私としてはもう少し深い解釈を期待したいところであるが、ともかく古市公威の日本工学史上における役割りを見ることができるよう思う。

特にこの“何気ない”とすら思える一文が私の心にとまった原因の一つとしてあげられるものは「工学叢誌」(明治12年創立の工学会の機関誌。明治14年11月第1輯発行)第1輯に大鳥圭介が寄せている公刊のための「緒言」との比較である。それは一言にしていえば、“専門分化のすすめ”である。「人各其門ヲ分テ入ニアラザレバ焉ゾ能ク其堂ニ上ルヲ得ルヤ。昔時博学多才ト称セラルルノ人ハ皆ナ諸学芸ヲ兼該セシモノノ如シト雖其実ハ唯ワズカニ各科ノ門檻ヲ窺フノミ。決シテ其蘊奥ヲ究メシモノニ非ルナリ」と。

* 東京大学教授 生産技術研究所

専門分化の気運の中における総合の立場は、古市が明治3年10月姫路藩貢進生2名のうちの1人として大学南校に入学、仏語科に籍を置き、同6月開成学校（大学南校の後身）は仏語科生のために「諸芸学科」を置き、古市もそれを専攻した、というところから始まっているように思える。明治8年第1回文部省留学生として派遣されたときも、「仏語、諸芸学科」から選抜されたと記録されている（因みに翌年同様に派遣された沖野忠雄・山口半六も仏語、諸芸学であった）。

明治8年9月に古市が入学したエコール・モンジュ、翌9年7月にさらに進んだエコール・サントラルでの学習が古市をどのていど土木（日本流に）に目ざめさせたかは、他の話題提供者の説に関心が寄せられるところである。さらに留学期間を1年延期して明治12年エコール・サントラル卒業と同時に入学したパリ大学理科大学で数学・天文学を学んだという記録も興味あるところであろう。

明治13年10月21日横浜帰国、同12月11日内務省土木局雇、14年10月東京大学理学部講師、同15年8月16日内務郷山田顕義に同行して札幌の豊平川改修計画に当たる。そうして同年11月24日願によって文部省御用掛（東京大学講師）を辞す。そうして明治19年5月1日工科大学教授兼工科大学長に任ぜられるまでの約3年間、彼は工学とか教職とかと離れる。この間に結婚、豊平川・信濃川・阿賀川・庄川等の土木局直轄工事の監督を勤めるのである。この間に、「諸芸学」の古市が「土木」の古市に転身するのではないだろうか。その事情は不明である。

しかし彼はやはり「鶴的存在」と自称する経歴をたどる。またそれを内心誇りに思い、有名な「将ニ将タル」ことの必要を確信していたようである。

大正4年1月、土木学会初代会長としての最初の会長講演「土木学会の方針に就て」において彼は、その「諸芸学」によって育った己れの経歴を、専門分化の進行する環境の中で、むしろ誇っている。「将ニ将タル」こともこの自信の上に出た言葉である。すなわち、

「而シテ余は極端ナル専門分業ニ反対スル者ナリ。専門分業ノ文字ニ束縛セラレ萎縮スル如キハ大ニ戒ムヘキコトナリ。殊ニ本会ノ方針に就テ余ハ此ノ説ヲ主張スル者ナリ。・・・所謂将ニ将タル人ヲ要スル場合ハ土木ニ於テ最多シトス。土木ハ概シテ他ノ学科ヲ利用ス故ニ土木ノ技師ハ他ノ専門ノ技師ヲ使用スル能力ヲ有セサルヘカラス。・・・又斯ク論シ来レハ工学全体ヲ網羅シ而モ土木専門ノ者カ会員ノ過半数ヲ占メタル工学会ヲ以テ恰モ土木ノ専攻機関ナルカ如ク見做シ荏苒歲月ヲ送り来リタルモ幾分カ恕スヘキ所アル如シ。・・・即換言スレハ本会ノ研究ハ土木ヲ中心トシテ八方ニ発展スルヲ要ス。是余カ本会ノ為ニ主張スル所ノ専門分業ノ

方法及程度ナルモノナリ」

明治21年5月7日、前年勅令第13号として公布された「学位令」に基づいて第1回の博士25名が誕生した。いわゆる“五々博士”と当時喧伝されたもので、文・法・理・医・工の5部門各5名ずつの最初の博士であった。工学部門では松本荘一郎・古市公威・原口 要・長谷川芳之助・志田林三郎らで、志田だけが工部大学校（電気、当初は電信学科第1回卒）出身で、他の4名は南校または開成学校卒。しかも古市・原口・長谷川3名が第1回文部省留学生で、松本はそれに先立って米國に留学していた。東京大学と工部大学校との差を歴然と示す事実のように思えてならない。

当時の“自由主義者”福沢諭吉ですら口を滑らせて“金時絵の重箱から菜っぱが出てきた”と評した工部大学校は、その開校（明治10年）当初から学科の専門分科が確立していた。しかし「一般に云って工部大学は南校より実地は優れていたが、数学の力などは劣っていた様だった」（工部大学校土木学科第1回2等及等石橋純彦談）。明治12年1月創立された工学会は工部大学校卒業生を主体として構成され、前掲の大鳥圭介の言葉のように専門分科を強調している。明治工学界のすでに重鎮と自他ともに許していた古市の工学会正会員としての入会が明治20年11月とおくれているのも注目される。古市の胸中には、開成学校（東京大学）の優位と、諸芸学の士大夫の学としての誇りが常に生きていたのではないだろうか。

初代（明治6年11月29日～）・3代・5代（明治11年5月14日暗殺の日まで）の内務郷大久保利通の時代が、外国人技術者、特にオランダ人長工師ファン・ドールンに代表される土木の時代とすれば、その次の時代は山県と古市の時代とすることができよう。

明治21年11月14日から同22年9月18日まで古市は内務大臣山県有朋に随行して欧米諸國を視察している。本場仕込みの彼のフランス語が爪宝されたということを、その伝記も伝えている。この間彼は工科大学長の職を免ぜられているが帰國とともに再任させられ、さらに明治23年6月14日には内務省土木局長を本務とし、工科大学教授、工科大学長を兼務することになる。明治27年には内務省土木技監、29年には再び土木局長兼任。

その彼が明治31年7月19日、願によって土木技監・土木局長・工科大学教授・工科大学長の看板的な肩書きすべてを外してしまう。彼の一転期であったように思う。少くとも教職からは45才にして離れてしまうのである。

通信次官、鉄道局長心得、鉄道作業局長官、京釜鉄道株式会社総裁などの経歴が続く。しかし“学者”としての経歴も絶えない。帝国学士院会員（明治39年9月）、同第2部々長（同42

年6月), 土木学会初代会長(大正3年12月), 理化学研究所々長(大正6年10月)などと続いて, 昭和4月10日, 東京で開催された英園工業会議会長としてその頂点に登りつめるのである。

昭和9年1月28日死。男爵, 従二位, 宮中杖差許し, 旭日桐花大綬章。建築でいえば, 明治の第一世代の殆んどは大正中期中にこの世を去っていた。教師コンドル(大正9年6月21日), 辰野金吾(大正8年3月25日), 片山東熊(大正6年10月24日), 妻木頼黄(大正5年10月10日)である。古市公威はたしかに永く生きた。明治工学界のまさに“将ニ将タル”人として, その生涯はまさに“諸芸学”そのものでもあった。

エコール・サントラル・デ・ザール・エ・ マニユファクトールと古市公威

武 井 篤*

古市公威(1854~1934)は、1875年7月10日横浜出帆、米國經由で9月1日パリ着、
l'École Mongeに入学した。翌1876年l'École Centrale des Arts et Manufacturesに入学
した。1879年8月同校卒業、11月パリ大学理学部に入学、翌1880年Licencie és science
の学位を得、9月1日パリ発10月21日横浜へ入港、帰朝した。

l'École Centraleの同級生に山口半六と沖野忠雄がいる。古市等と入れちがいに山田虎吉が
卒業した。この4人は下記に下宿した。この下宿は現存している。

Hôtel Boucherat, 110, rue Turenne, Ⅲ^e,

彼等の通学した当時のl'École Centraleはこの宿から5分位の場所、5, rue de Thorigny
にあった。現存しているこの建物の左右に90×70cm位の青銅の銘板がはめこまれている。す
なわち、

左側には、

EN 1829

L'ÉCOLE CENTRALE

DES ARTS ET MANUFACTURES

FUT FONDÉE EN CET HÔTEL

PAR

LAVALLÉE J.B. DUMAS

OLIVIER ET PÉCLET

ELLE DEMEURA JUSQU'EN 1884

1929.

右側のものは、

EN 1656

CET HÔTEL FUT CONSTRUIT

PAR JEAN BOUILLER DE BOURGES

POUR PIERRE AUBERT DE FONTENAY

PREMIER DES GABEUES

(HÔTEL SALÉ)

AMBASSADE DE VENISE 1671

HÔTEL DE JUIGNEY 1768.

ここに刻まれている、l'École Centraleの創立者について述べないと、この学校の特色に触

* 元参議院建設委員会調査室長

第 1 表

入 学 試 験	第 1 学 年			第 2 学 年			第 3 学 年			
	口 頭	筆 記	綜 合 試 験	学 期 均 学 平 均	学 习 期 学 学	学 期 均 学 平 均	学 期 均 学 平 均	学 习 期 学 学	学 期 均 学 平 均	綜 合 試 験
算 術	16	16	20	I, II, III	応用力学	16	I, II	応用力学	19	18
代 数										
初 等 幾 何	16	16	19	I, II, III	分析化学	16	I, II	工業化学	17	18
画 法 幾 何										
幾 何 学	16	16	18	I, II, III	工業物理	16	I, II	冶金学	18	16
三 角 法										
解 析 幾 何	16	16	17	II, III	蒸気機関	18	I, II	鉱山開発	19	15
物 理										
物 理 学	17	16	19	III	通常の構造(1)	15	I, II, III	公共工事	18	17
化 学										
博 士 学 位	17	16	18	I	技術学	17	II, III	鉄道	17	18
製 図 水 彩										
施 工 図	15.14	17	17	II	畜産芸	17	II	風法	15	18
平 均										
	16.2	17	16	I, II, III	化学実験	17	I, II, III	化学実験	19	17
	16	16	16	III	工業物理実験	16	III	材料強弱学計算	16	18
	16	16	16	I, II, III	土地測量	16	I, II, III	各種計画・特殊計画(1)	14	15.0
	16	16	16	III	機械構造実習	16	III	暖房	14	15.0
	16	16	16	III	機械構造実習	16	III	暖房	14	15.0

建築設計 機械設計 建築クローキー 機械クローキー 現寸図作成 または計算 図法幾何学 及石工規矩法 高次分析 物 総平均点 17.84 2年への進級 184人中 3位 170人 合格	15.5 15.8 17.4	休暇中の学習 建築設計 18 機械設計 18 力学計算 16 基礎計画(2) 17 運動学 17 小学校 15 金属切断 17 伝動 15 屋根組 16 シャー 15 ボイラ 17 住宅 14 総平均点 16.90 3年への進級 171人中 6位 169人 合格	14 13 17 15 16.43 17.05 16.85 163人中 12位 154人中 7位 41人中 2位 称号取得 Diplôme	市役所 鉄道 停車場 車輪 3学年平均成績 競争試験 了—手橋 卒業成績 競争試験前成績 競争試験後成績 競争試験後専攻成績
(1) Stérotomie	(1) Construction Civil (2) Elements de projets et projet	(1) Projets divers et de Spécialité		

れることができないが、まず古市公威のこの学校での成績にふれておこう。

古市公威の操行についての評が保存されている。この中での評には、次のように書かれている。“非常によい学生で、聡明で、態度がよく、勤勉である”といい、また“あらゆる点で好学生”であり“全力を尽す”とも“甚だ静かで真剣に勉強する”といている。ただ、“実際的なことに弱く、計画に対してゆっくりしている”ともいう。

なお、古市と同期に卒業した人数は次のとおりである。専門学科の違いは第2学年での *Eléments de projets et projets* と第3学年の *projets divers et de specialiné* だけである。古市のいう“…専門分業の方法及び程度は場合により大いに取捨せざるべからざることは是れなり、即ち極端なる専門分業に束縛せられて蕪爾なる限界に齟齬するが如きは、余の採らざる所なり”というのはこの辺にその消息を見出せるものではなからうか。

1879年卒業生

	<u>Diplômes d'ingénieurs</u>	<u>Certificats de capacité</u>
機 械	34	8
冶 金	22	9
建 設	27	13
化 学	22	11

(他に称号をとらずに卒業したものがいる)

同期生は入学当時376人であった。l'Ecole Centraleは入学は容易であるが卒業はむずかしいといわれる所以である。

次に l'Ecole Centraleの歴史にふれなくてはならないがまず、これに関係すると思われるフランス革命以後の年表を掲げておく。

年 表

○革命時代(1789~1795)。国民公会(Convention nationale)は、

1794年3月 l'Ecole Polytechnique (1)

10月 Conservatoire des Arts et Métiers (2)

等各種の学校を創設した。

(1) はじめは l'Ecole Centrale des Travaux publics といわれ、のちに改称した。非軍事学校として内務省に所属し、l'Ecole des ponts et chausséesの校長 Lamblardie が校長となり、Lazare Carnot、Monge 等が補佐した。

1804年7月NapoléonはMongeの反対を押切って軍直属の学校にした。Napoléonはこれを“黄金の卵を生む牝どり”といい、Foy將軍は“帝国は賢者の苗床を戦争の神学校にした”という。

(2) 技術博物館であり教育施設でもある。ジャガールの織機、ディセルがその天職を見出したのもここであるといわれる。教育施設としては、はじめ公開実験を主としたが、1806年、製図、応用幾何学、織物の講義をはじめ、1819年“商業および工業への科学の応用に関する学校”となった。

1795年2月 Ecoles Centrales 創設、10月改組、数学とラテン語のかたわら、物理・化学・農業・その他諸技術を学ばせる。12才入学、6年制で全国に設置しようとしたが成果はあがらず、1802年 Napoléon 時代に廃止。国立の Lycee と地方の Collège となる。

○総裁政府 (Le Directoire) (1795~1799)

○執政政府 (Le Consulat) (1799~1804)

○帝政 (L'Empire) (1804~1815)

革命のもたらした成果の一つはフランスの統一の達成であった。この王国は離反なき地方の集合であって、相異なった法や習慣および関税をおしつけられ、これに支配されていた。革命はこれらの小国を打ち壊し、新しい国をつくった。これとともに中央集権化が現われる。教育に関しても、l'Université de Franceによって、基礎、中級、上級のすべてを監督することとなった。

○復古王政 (Deuxième restauration) (1815~1830)

1815年 ルイ18世即位

1824年 シャルル10世即位

1830年 7月革命、8月オルレアン家のルイ・フィリップ王位につく。

○7月王政 (または Branche D'Orléans) (1830~1848)

1830年 ヨーロッパにコレラ発生

1848年 2月革命

○第2共和制 (Deuxième République) - 臨時政府

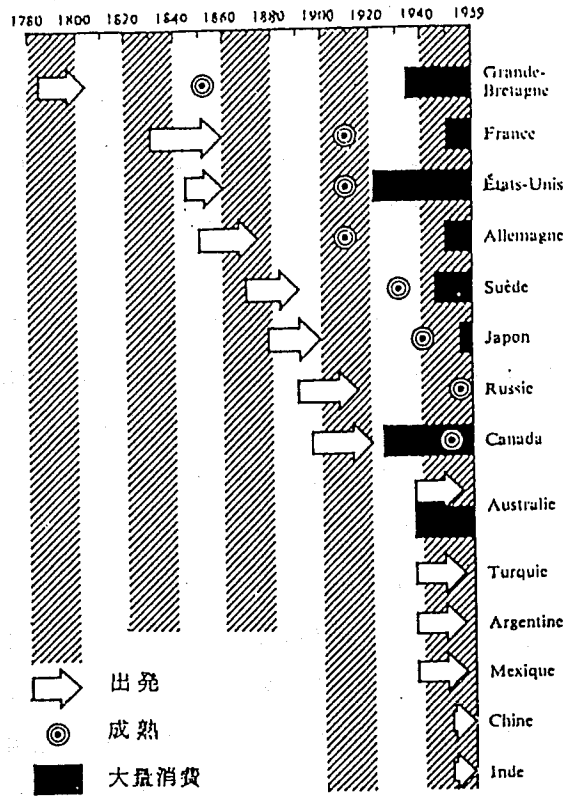
1848年 2月、ルイ・フィリップ亡命

第I期、臨時政府 (1848年2月~同年5月)

2月、国営仕事場の設立

第II期、憲法制定国民議会期 (1848年5月~1849年5月)

第2表 先進工業国の発展段階



Source : W.W. Rostow, *les Étapes de la croissance économique*, coll. "Points", Le Seuil, 1970, p. 7

第3表 先進工業国の順位（工業発展の水準による）

Rang	1810	1840	1860	1880	1900	1910
1	Royaume-Uni	Royaume-Uni	Royaume-Uni	Royaume-Uni	{ États-Unis Royaume-Uni	États-Unis Royaume-Uni
2	{ Belgique États-Unis	Belgique États-Unis	{ Belgique États-Unis	{ Belgique États-Unis	Belgique	Belgique
3	{ France Suisse	Suisse	Suisse	Suisse	Suisse	{ Allemagne Suisse
4	{ France Suisse	France	France	Allemagne	Allemagne	{ France Suède
5	{ Allemagne Suède	{ Allemagne Suède	Allemagne Suède	France Suède	{ France Suède	{ France Suède
6	{ Espagne Italie	Espagne Italie	Espagne Italie	Espagne Italie	Espagne	Espagne Italie
7	{ Espagne Italie	Espagne Italie	Espagne Italie	Espagne Italie	Espagne	Espagne Italie
8	{ Espagne Italie	Espagne Italie	Espagne Italie	Espagne Italie	Espagne	Espagne Italie
9	{ Espagne Italie	Espagne Italie	Espagne Italie	Espagne Italie	Espagne	Espagne Italie
10	{ Espagne Italie	Espagne Italie	Espagne Italie	Espagne Italie	Espagne	Espagne Italie
11	{ Espagne Italie	Espagne Italie	Espagne Italie	Espagne Italie	Espagne	Espagne Italie

Source : P. Balroch, *art. cit.*, p. 1110.

1848年6月、國營仕事場の廃止

12月、ルイ・ボナパルト大統領選出

第Ⅱ期、立法国民議会期（1849年5月～1851年12月）

1851年12月、ボナパルトのクーデター。議会解散。

○第2帝政（Le second empire）（1852～1870）

1852年12月、ボナパルト皇帝となりナポレオン3世と称す。

1867年 パリ万国博

1868年 日本、明治時代に入る

1869年 スエズ運河開通

1870年 ナポレオン3世、プロシヤに捕えられ、帝政崩壊。

○第3共和制（Troisième République）（1871～1940）

1871年 パリ・コンミュン

1878年 パリ万国博

1880年 パナマ運河工事開始

”7月王政と第2帝政時代におけるほど、フランスが富を築いたことはなかった。この繁栄は、一部、19世紀の産業革命に結びついている。イギリス・ドイツ・ベルギーの富裕化は、フランスのそれと時代を同じうしている。この繁栄は、また諸政府が、当時、産業の発展や交通と都市化の手段の発達に、利益を認めたことに基づいている”（モロア）ここに”先進工業国の経済発展の足どりとその順位”を掲げておく（第2表、第3表）。

そして英国の産業革命の進展は著しいものがあつた。原動蒸気機関を例にとれば第4表のようである。

さて、この状況を背景にして l'Ecole Centrale は生れ、育つのであるが、まずその創立者に関する事から述べよう。

第4表 ヨーロッパの固定蒸気機関の圧力
（1000馬力単位）

Pays	1840	1850	1860	1870	1880	1888
Grande-Bretagne	350	500	700	900	2000	2200
France	34	67	178	336	544	796
Allemagne	20	40	200	900	1680	2000
Autriche	2	9	36	112	251	400
Russie	10	35	60	149	237	300
Total Europe	450	720	1350	2760	5270	6350

創立者たち

Lavallée (Siphonse) (1797～1873), Sarthe 県に生れ、Paris の法科大学卒業。Nanré で実業に携わる。社会学的立場から工業問題に非常に関心を持ち、応用科学教育のための技

術学校の必要性を痛感した。そしてこの技術学校は、大事業の経営と工業の発展のための指導能力を持つ活動的人間の養成を計ることをその目途とした。彼は同志を求めてParisに肩を移した。ここで新聞 *le Globe* の創立者 Dubois を知った。また、ここで *cours de l'Athéuée* の熱心な聴講者となり協力者 Duwas を見つける。

Olivier (Ghédore), (1793~1853) 1811年 *l'Ecole Polytechnique* 入学, ついで *l'Ecole d'Application* に入り砲兵士官となる。1821年から26年までスウェーデンで築城の講義をして, 1826年にフランスに帰った。彼は *convention* によって設立された *l'Ecole centrale des travaux publics* が Napoléon によって軍の学校にされたことをなげいていたという。

Péclet (Engéhc), (1793~1857) 1812年 *l'Ecole Normal Supereure* の最優等卒業生。Dulong, Ampère, Grey-Lussac の弟子である。1815年, Warseille の Collège の物理の教授となった。労働者のための自主講座を開く等, 学問の民衆化に務めた。Paris に戻り *l'Ecole Normale* の講師となった。 *le Globe* の Dubois は彼の同窓であって, Dubois によって Laval-lée と相知ることとなった。

Dumas (Jean-Baptiste) (1800~1884) Alés に生れ, Collège 卒業後薬局の手伝いをしたのち, 1817年 Genève に行く (1800年ごろの Genève には物理学および生理学の研究に従事する多くの勝れた自然科学者たちが活動していた。「ダンネマン, 自然科学史 p.380」) ここでまた薬局の手伝をしつつ大学の講義を聞き, 沢山の科学者達に交った。そして偶然会った Humboldt に Paris 行をすすめられ 1822年 Paris に着いた。Genève での勉学成果が注目され, Srago の推せんで *l'Ecole Polytechnique* の復習教師になり, また Ampère の推せんで *cours de l'Athéuée* の講義を受持つことになった。Lavallée はこの講義を聞いて Dumas に助けを求めることになる。

以上5人の創立者に特徴的なことは,

1. Dumas を除いて, 皆 *Grandes Ecoles* の卒業生であること。特に *Polytechnique* との関係が深いこと。
2. *Cours de l'Athéuée* と関係があること。(Lavallée-Dubois-Péclet)
3. 全員が Science そのものより, *Application* および工業を考えていること。このことは学

校の名称が示している。

次に学校の歴史を簡単に述べる。

1828年12月23日、Le ministre, grand maître de l'Université H. de Vatimesnil の名で学校創立許す。学生は通学生に限るとされた。ついで校舎としてHôtel de Juigneを年14,000Fの20年契約で賃借した。

創立者達は1794年のl'École Centrale des travaux publicsの最初のprogrammeをそのまま採用した。

1829年11月、145人の生徒が入学。Pécletの物理の講義が第一声であった。Dumasは一般化学と分析化学を教えた。

1830年一 発足は幸運であったが、1829年8月首相がMartignacからPolignacにかわった。新政府は学校に対して苛烈で、学校から税金をとりあげてその存在を脅かした。この首相は出版の自由を含む7月4勅令を王をして発令させ、7月革命を引き起こす。このとき生徒達はPolytechniqueの生徒と共に街頭に出て戦った。だが、この事件の影響で全生徒は170人に過ぎなくなり、更に1832年のコレラに追打ちをかけられた。この状態も理事者の努力で国の補助を受けられるようになり、また、卒業生が官職につけるようになって、漸次改善され、1836~1840年には安定を見るようになった。この間、研究指導者として、Bardin、ついで、Empaytaz (Waterlooの勇士であった)を迎えているが、ともにl'École Polytechniqueの卒業生であって、Polytechniciensが、この学校に協力していることは注目すべきである。

1848年一 2月革命に際しては臨時政府に協力するために生徒達はLavalléeとOlivierによってArapoに紹介された。Arapoは"勉学に戻りなさい、フランスのために更に役立つことを約束せよ"といったという。そして2月25日、国民仕事場が設立され学校の卒業生と75人の生徒が徴集されてここで働くことになったが、この仕事場は、怠業その他で混乱したので、Lavalléeは心配して、学校につれ戻したという。

1849年から'57年までは安定期で、私学であるこの学校は高等技術教育について第一級の地位を得た。'57年までに3,342人が入学し、1,291人がdiplômeとcertificatを得ている。

創立以来、これまでの期間に特筆すべきは、

(1) この学校がフランスで鉄道の講義をした最初の学校であること。— PerdonnetはPolytechniqueを卒業し、英国に渡り、鉄道建設の試行を学んだ。帰国して鉄道の重要性を唱えたがponts et chausséeの行政当局の反対に会い、また公共事業大臣であったThiersさえこれを

冷笑したという。しかし、
1831年この福音の伝道者に
l'Ecole Centraleは、講座を
与えた。l'Ecole pont et
chansséeが鉄道の講義を始
めたのは1834年のことであ
る。
Perdonnetは1867年その
死まで33年間この学校に在職
したのちに校長となった。第
5表に鉄道関係の数字をいれ
ておく。

(2) la Société des
Ingeieurs Civils の設立と
le Genic Civilの刊行。—こ
の学会は1839年に同窓会を
作ろうという試みがあったが成
功せず、1848年の革命後、こ
の学校が中心となって同年
3月、le Société des Inge-
ieurs Civilsとして設立さ
れた(33人の発起人中28
人が卒業生)。始め Société
Centrale des Ingeieurs
Civilsとあったが、50年にな
って、Centraleを消して
Société des Ingeieurs
Civilsとした。そして1875
年まで3月に1回Bulletinを
発行した。これが2回になり

第5表

A フランスにおける鉄道投付			
Périodes	Dépenses de premier établissement (moyenne annuelle en millions de F)	Accroissements décennaux	
		Chemins de fer d'intérêt général (voies en km)	Chemins de fer d'intérêt local (voies en km)
1825-1834	4	52	
1835-1844	34	560	
1845-1854	175	1 987	
1855-1864	437	6 191	
1865-1874	263	7 206	432
1875-1884	398	7 198	1 770
1885-1894	280	6 553	517
1895-1904	210	8 033	2 067
1905-1913	312.5	2 502	3 432

Source : J. Marewski, (Y a-t-il eu un take-off en France ?) Cahiers de l'I.S.E.A., mars 1961, p. 83.

B 鉄道網の発展

Pays et continents	1850	1870	1900	1913
EUROPE	23 500	104 000	282 000	359 000
-Royaume-Uni	10 500	24 500	33 000	38 000
-Allemagne	6 000	19 500	43 000	61 000
-France	3 000	17 500	36 500	49 500
RUSSIE	1 000	10 500	50 000	65 000
AMÉRIQUE DU NORD	14 800	90 000	357 000	457 000
AMÉRIQUE CENTRE ET SUD	—	3 000	42 000	107 000
ASIE	—	8 400	60 000	108 000
AFRIQUE	—	1 800	20 000	44 000
OCCÉANIE	40	1 800	24 000	35 000

1. Sur le rôle décisif des capitaux français le continent, cf. R. Cameron, la France et le Développement économique l'Europe, 2^e partie.
2. Cf. les cartes de Ch. Morazé, les Bourgeois conquérants, p. 230-231 et R. Cameron, op. cit., passim.

C 鉄道の発展指数

Pays	1840	1860	1880	1900	1910
Allemagne	1.1	21	54	70	75
Belgique	6.6	30	60	88	102
Espagne	—	6	23	40	58
Etats-Unis	2.9	19	53	105	122
France	1.2	18	44	77	87
Italie	0.8	6	23	38	38
Japon	—	—	0.2	11	14
Royaume-Uni	7.2	44	60	69	69
Russie	—	1	10	21	24
Suede	—	3	32	61	76
Suisse	—	28	63	79	88

Source : P. Bairoch, (Niveaux de développement économique de 1810 à 1910), in A.E.S.C., nov.-déc. 1965, p. 1106.
L'indice a été obtenu par un rapport entre la longueur du réseau, la population du pays et sa superficie.

更に1881年になって学校の50周年の記念として"Le Genie Civil"が刊行されることになった。この発行にはle Tempsの協力があつた。

1857年国立移管 — 1855年になってLavalléeも疲れて、また協力者Olivierにも死なれる等で、学校の将来を憂えた。結局、国立移管が最善であると考えに至つた。'55年、Napoléon IIIに陳情した。議会とConseil d'Etatの承認を得たのは'57年のことである。そしてこの学校にl'Ecole imperialeの資格と卒業試験のDiplômeを得たものにIngenieurs des Arts et Manufacturesの称号を許すこととなった。

1862年 — Perdonnetが校長に就任した。またDumasが理事長になった。Lavalléeは学校に訣別した。その際、同窓の団結を呼びかけ、理事会においての卒業生代表の役割を強調している。'67年Perdonnetが没しこの学校の第一回卒業生である北部鉄道の技師長Petietが校長となる。Petietはパリ包囲下の'71年1月突如死亡し、'73年にはLavalléeが死去する。

1872年から1884年まで — この学校に対するパリ・コンミューンの影響は大きかった。混乱時において政府は学校に興味を示さず、校長を任命せず、その上、専攻科に農業を設置しようとした。これに対し学校側はもう一度払下げを受けて同窓会で運営しようとする案も出た。理事長Dumasの努力でこの危機をのりきつた。1878年の万国博における卒業生の業績と'79年の50周年記念祭は卒業生の団結を強めることとなった。この万国博と記念式典に古市公威は出席しているはずである。1882年に至ってCauvetが校長となり、Saint-Martin市場跡に新校舎建設を始めることとなる。

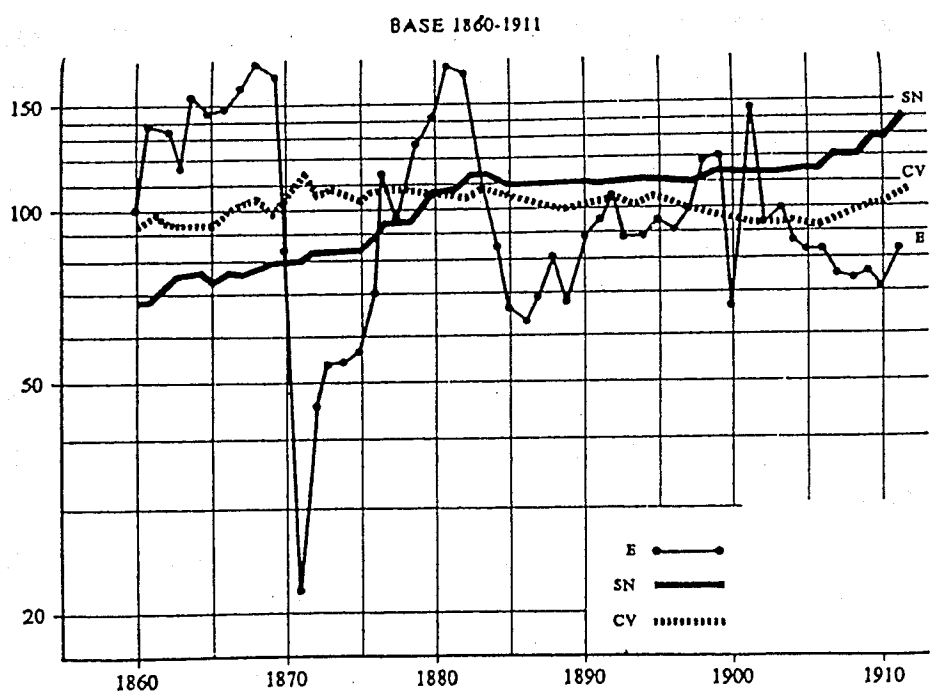
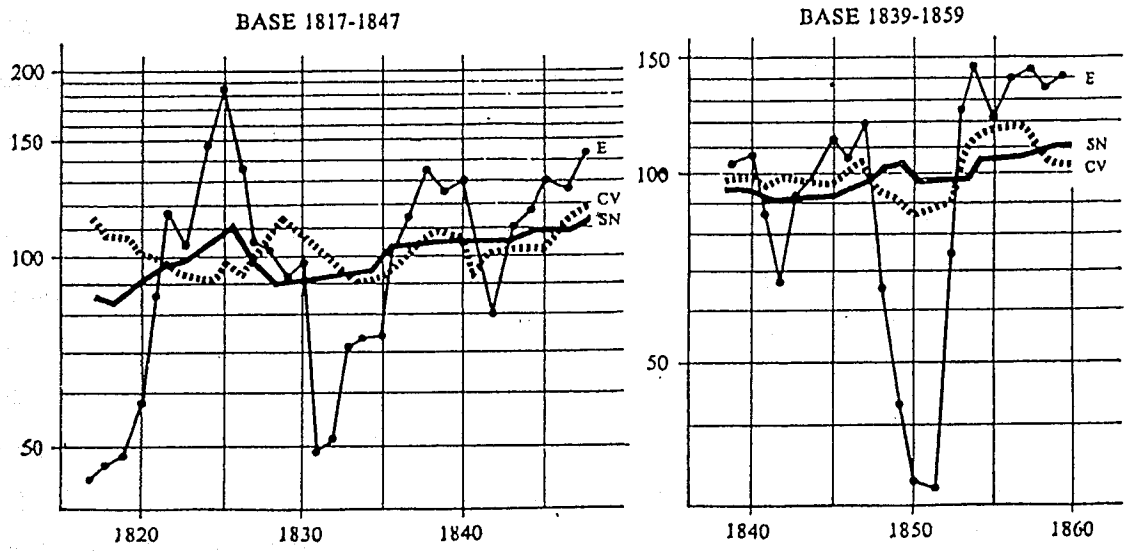
ここにフランスの工業活動のあとを示す表をかかげる。これを見ると工業活動が停滞するときに学校が危機に陥っていることがわかる。そして向上するときに学校が安定する。工業活動と学校の盛衰が関係している(第6表)。

1829年にこう書かれている。

"この学校の特有の目的は、工場の指導者、工業の指揮者、土木技師、構造家の養成にある。そして、工業的思考を持つという人に、価値の評価であれ、市場への注目であれ、必要な教育をすることである"。

古市公威は、1871年のパニックを脱したフランスの向上期にここに学び、日本の後進性から先進国への道をめざして帰国したといってもよからう。

第6表 Source : J.Rougerie, <Remarques sur l'histoire des salaires a Paris au XIX^e siecle>, le Mouvement social, avril-juin 1968, p.106-107.



参考文献

E. MOUCHELET : Notice Historique sur L'École Centrale des Arts et
Manufactures.

LÉON GUILLET : Cent Ouns de la vie de L'École Centrale des Arts et
Manufactures 1829-1929

(歴史書として他に Courberousse 1879 と Pothier 1887 各 500 頁のものがある)

J.P. RIOUX : La revolution inductrielle 1780-1880, 1971. Seuil.

PUJARRIC : Precis chronologique d'histoire de France.

ANTOINE LÉON : Histoire de l'Education Technique.

ANDRÉ MAUROIS : Histoire de la France vol. II. Albin Michel Société de
Savants, la Grande Encyclopédié

レオポルト, インフルト : 神々の愛でし人, 市井三郎訳, 日本評論社

薩長政権と古市公威

金 関 義 則*

古市公威が生きた時代の政治、経済、社会的条件の考察なしに、古市の業績を論評することは適切でない。ここでは時間の制約もあるので、古市と薩長政権とのかかわりに絞って考えてみたい。薩長政権とは何か、薩長政権の形成、発展、衰退の経緯について私見を述べる余裕がないので、すでに広く読まれている歴史辞典でどのように解説されているか、代表的な事例をまず紹介したい。

東洋経済新報社から発行された「日本近代史辞典」1958年には藩閥という項目があって、次のように述べられている。

明治維新の推進力であった薩摩・長州・土佐・肥前の4藩、ことに前2者の排他的・朋党的結合。かれらが明治政府の中核を固めるに至ったのは、廃藩置県を終ったところからであるが、旧薩・長両藩出身者を中心とし、旧土・肥両藩出身者には伴食的地位を与えつつ、その内部において相争うことはあっても外部に対しては結束して戦かい、寡頭専政支配を行うものであったが、征韓論による分裂、明治14年の政変によってその傾向はますます強められた。また、この傾向は中央政府の首脳部についてだけでなく、部内全般に通じるものであった。かれらは陸海軍をも手中に収め、殖産興業の名の下に保護育成した資本家・政商と結び、議会開設後もはじめは超然主義をとり、貴族院、枢密院等を利用しつつ、政党内閣を排して、その支配の維持に努め、のちには出身旧藩を異にするほかは社会的基盤においてほとんど異ならなかった。政党勢力の伸長に伴い、まずこれと妥協することにより、次には自ら首領としてこれを組織することによって、主導権を確保し、文官任用令改正により政党员的の政府部内進出を妨げるとともに、官僚中から自らの後継者の養成確保に努め、また、いわゆる帰化閥人を加えて勢力の没落を防ぎ、最高首脳はいわゆる元老として閣外から枢機に参与することにより、その支配の維持をはかった。閣僚の大多数が藩閥出身者から成るような事態は明治30年代以降ようやく衰えたが、上に述べた形式での支配は大正中期まで存続した。その中心になったのは、はじ

* 科学史家

めは大久保利通、のちには伊藤博文・山県有朋らである。

「角川・日本史辞典」1966年には藩閥政治の項目があって、次のように述べられている。

主として明治維新に中心的役割を果たした薩長土肥4藩の指導層が維新以後も出身藩に依拠して派閥をつくり政治権力を独占したことをいう。征韓論で分裂し、西南戦争直後、木戸孝允・大久保利通死後、岩倉具視を中心に伊藤博文ら薩長出身官僚が実権を握り、1885(明治18)初代内閣も薩長勢力の均衡の上に成立。以後歴代内閣は伊藤・山県有朋・松方正義・黒田清隆などを首班に、薩長出身官僚やその系列に属する官僚によって組織。日清戦争後政党勢力が伸長するが、政権交替の主導権は元老が握り、1912(大正1)第3次桂内閣の出現で第1次憲政擁護運動が起こり閥族打破が叫ばれたが、1924第2次護憲運動の高揚により加藤高明首班の護憲三派内閣の成立するまで藩閥系政治家が政権運用にあたった。また長州の陸軍、薩摩の海軍といわれたように、軍部は長く薩長出身者が支配、有利な地歩を維持した。藩閥の呼称は反政府的立場にたつ政党によって唱えられた。

次に、他の話題提供者となるだけ重複しないように注意しながら、古市の生涯をたどる形で、薩長政権とのかかわりを探ってみよう。

明治19年に古市公威は、工科大学教授兼工科大学長となった。これを東京大学総理の渡辺洪基の人選のように見るものもあるが、副総理の浜尾新、理科大学長の菊池大麓の強い要請によるものであった。しかも土木局の方は辞職せず兼任となったのは、内務大臣の山県有朋が意向による。しかも翌々年は山県のヨーロッパ視察旅行の首席随員に抜擢された。約2年間の土木局勤務で才幹を大きく評価されたからである。ヨーロッパ視察旅行の間は、工科大学の方は辞任し、帰国してから再任されるという形になっている。それから8カ月で土木局長に任ぜられ、工科大学教授兼工科大学長の方が兼職になった。それから3カ月たらずで最初の勅選議員として貴族院に議席を与えられ、枢密顧問官になるまで34年間つとめることとなる。

明治31年に内務省土木局も工科大学も辞任してしまう。大隈重信内閣の板垣退助内務大臣の強い慰留を拒んで土木局を去ったのは、政党内閣を嫌う山県有朋に殉じたと見られる。政党内閣を嫌って山県の周辺に集った高級官僚の反抗と、自由党、改進黨の派閥の内紛によって大隈内閣が4カ月で倒れ、山県有朋内閣(第2次)ができるまで古市は通信次官に任ぜられるが、次の伊藤博文内閣には留任せず山県に殉じている。明治33年に鉄道国有法案、私設鉄道買収法案を用意したが、審議未了で実現しなかった(それが制定されたのは6年後、日露戦争の後のことである)。

明治36年、桂太郎内閣（第1次）の鉄道作業局長官になったのは、地位としては格下げであるが、京釜鉄道の速成のための方便で、桂のためというよりも山県のために起ちあがったと見られる。鉄道作業局長官は休職の形で、京釜鉄道株式会社総裁となり、しかも現地に出かけ、工事を積極的に推進した。全ては日露戦争に勝つためであった。戦勝の後には、韓国統監の伊藤博文に深く信頼されて統監府鉄道管理長官の重責を果たしてから帰国した。明治39年に上京したとき、陸軍参謀本部で児玉源太郎（陸軍大将、子爵）と会い、やがてできる満鉄の初代総裁になることをすすめられるが、辞退して後藤新平を推薦した。このとき満鉄を引受けた後藤新平は、日露戦争の論功行賞で男爵を授けられた。

古市はもはや再び官僚として鉄道行政に関係しないが、広い視野にたって国内、国外の鉄道に強い関心を抱きつづける。これも山県に対する献身であった。山県は強い非難を押しきって、大正8年に男爵を授けられるようにはからった（当時の首相であった原敬がそのことを日記に書き残している）。

古市が枢密顧問官になったのは山県の没後であるが、山県健在のときと同じ覚悟で、責務を誠実に果たした。山県に信頼され抜擢されて、古市は山県の期待を大きく上廻る業績をあげた。それは古市が時勢をよく読みとって、柔軟な姿勢で謙虚に対応したからと思われる。

古市は山県だけでなく、長州藩閥の巨頭、すなわち伊藤博文、井上馨、山田顕義、山尾庸三からも、その見識と才能を高く評価された。長州藩出身ではないが、長州藩閥に属して権勢を振るった都築馨六も、古市のおかげで若くして土木局長になり、山県の組織した官僚グループのリーダーとなることができた。

山県も古市も最も重大なことを語ったり記したりしていないから、簡単に断定することはできないが、段々に解明していくことは可能と思われる。

参考資料

- 金関義則：歴史からみた文化と総合の基盤 「土木学会誌」1968年1月号
- 金関義則：古市公威と土木学会の設立 「土木学会誌」1975年1月号
- 金関義則：古市公威の偉さ 「みすず」1974年6月、7月号
- 金関義則：山川健次郎の働き 「みすず」1976年9・10月合併号

古市文庫について

井口昌平*

〈古市文庫〉とは、もと古市公威の蔵書であったもののうち、昭和10年に東京大学工学部土木工学科に古市の遺族によって寄贈されたものをさす。その規模は冊数にして200冊ほどのものである。

この文庫は、まず次の三つに大別できる。

(1)古市のフランスの大学での受講ノートならびに少数の自筆のノートなど、約80冊、(2)大部分フランス語、一部英語の専門書、約75冊；(3)主として特定の土木事業を報告する和書、約45冊、これらのうち、(3)に属するものは、恐らく古市が自から手に入れたのではなく、古市に寄贈されたのであろう。そして、それらの書籍はほかの場所でも比較的容易に見られるものだから、〈古市文庫〉から除外されてもさしつかえない。したがって、ここでは(1)と(2)に属するものだけを取上げる。しかし、筆者が古市文庫を調べ始めたのは、ほんの2年ほど前のことであり、しかも未だ僅かな時間しかかけていないので、ここに報告することのできることは、明らかに貧しいものに過ぎない。不十分な調査のために誤りをおかしたり、偏見に落ち入ったりしないようには努めた。

この調査の中から古市公威の名「公威」の読み方についてのひとつの証拠が得られた、それは「きみたけ」ではなくて、「こうい」だ、というものである。

1. 古市の留学時代の受講ノートなど

これらのものは大別して、(1)受講ノート、(2)そのほかの自筆(フランス語)のもの、(3)中央工業大学校で描いた製図、(4)同校で教材として受けた図面、の四つとすることができる。

1.1. 受講ノート

古市の留学の時代に、フランスの大学で授業がどのような形で行われていたのか、というこ

* 東京大学教授 生産技術研究所

とは、私は想像するほかはない。しかし、古市のノートをざっと見、また教育の分野への機械文明の持込みがごく最近ようやく目立ってきている事実を思い合わせると、その筆記作業が当時どれほど重要であったか、ということが推察されてよいであろう。その推察を裏打ちすることが、古市の筆記帳そのものの中から見いだせる。古市がパリに留学して、中央工業大学 (Ecole Centrale des Arts et Manufactures) を優等の成績で卒業し、またそれに続いてパリ大学の理学部や法学部でも学んだ、ということはよく知られている。中央工業大学校では、当時筆記帳は学校当局によって作られたものが使われていたらしい。その筆記帳には、授講のノートをとることについて、1ページにわたる注意が印刷されてある。古市はその注意を忠実に守ったのであろう。その注意書きは次のようにほん訳してよいと思う。

受講筆記帳および問題演習帳への

筆記に関する教え

それぞれの講義に対してはそれぞれ新たに筆記帳を用意する。筆記帳は本校で採用する様式のものと同様のものでなければならない。

本校における講義でとられたノートを収めた筆記帳は勉学の最も重要な部分の一つをなす。筆記は講義の間の休み時間に整理してはならない。学生にはその時間はない。ノートは講義室で、筆記しなければならない。その際、大きな余白を残しておいて、受講の日の夜に自宅で必要に応じて補足するのにそなえるようにする。

講義室で教師が黒板にえがいた図や画、ならびに学生に示した模形は、鉛筆で筆記帳に写し取らなければならない。

夜は、筆記帳を次のように補足しながら勉学すること、講義の間に示された計算は詳細にし、書き残した語を書き入れ、脱落箇所はメモとか、ほかの学生の筆記帳の助けを借りるとか、あるいは石版刷りの講義録や教師の推薦する書籍によって完全にすること。それらの書籍はすべて本校の図書室で見出すことができる。また、図は製図用インクで注意深くすみ入れする。図のすみ入れは、鉛筆書きの線をなぞるだけのことではない。それと同時に、正確に寸法を書き入れ、見える部分と見えない部分を明示し、またあらゆる細部にまで正確に比例させることを目的として、図の対象物を完全に理解するようにしなければならない。この作業のためには、推薦された書籍の付図を十分に参考にすること。

こうしてできた筆記帳は、3年間の勉学の後には、一種の蔵書となり、学生が後に土木技師となつたときに指揮をまかされる仕事の中で参考書として役立つはずである。

筆記帳は次のようにして随時点検される。

1. 講義が終ったときに、教師が何名かの学生にただちに提出を求めて、教師が点検する。
2. 特別試験の後に補修教師が点検する。
3. 学年末の総試験のときに教師が点検する。

問題演習帳は、学習日程表に示してある通りになっていなければならない。適当な時期に行われなかった問題は効用の大半を失うことになる。問題演習帳も試験の手段の一部となる。

古市の受講ノート

これらのノートの一覧表を作るのにあたって、講義の種目を重視する立場をとって、国際十進分類法 (Universal Decimal Classification, UDC) の順序に従うことにする。

- (1) UDC 33 — Leçons d'Economie politique, professées par M. Cauwès, à la Faculté de Droit de Paris (パリ大学法学部 Cauwès 氏による「経済学」の講義)。
- (2) UDC 33 — Leçons d'Economie politique, professées par M. Cauwès, à la Faculté de Droit de Paris (パリ大学部 Cauwès 氏による「経済学」の講義)。
(1)の続きか
- (3) UDC 34 — Notes sur les principes de droit politique — Leçons professées par M. Franck au Collège de France (コレージュ・ド・フランスにおける Franck 氏による「参政権」の講義)。
- (4) UDC 351.812:625.1 — Notes sur l'administration des chemins de fer français (「フランスの鉄道の管理」についての講義)。
- (5) UDC 512 — Algèbre supérieure (高等代数学)
- (6) UDC 515 — Géométrie descriptive (画法幾何学)
- (7) UDC 517 — Leçons d'analyse mathématique, professées par M. Bouquet, à la Faculté des sciences de Paris (パリ大学理学部 Bouquet 氏による「解析学」の講義)。
- (8) UDC 517.3 — Leçons de Calcul intégral, professées par M. Bouquet, à la Faculté des sciences de Paris (パリ大学理学部 Bouquet 氏による「積分学」の講義)。
- (9) UDC 517.3 — Leçons de Calcul intégral, professées par M. Bouquet, à la Faculté des sciences de Paris (パリ大学理学部 Bouquet 氏による「積

分学」の講義)。 (8)の続きか

- (10) UDC53:62 — Ecole Central: Cours de physique industrielle, par M. Ser (中央工業大学校 Ser 氏による「工業物理学」の講義)。
- (11) UDC531 — Ecole Centrale des Arts et Manufactures. Année 1876 ~ 1877. 1^e Année d'étude. Cours de Mécanique générale. Professeur M. Lévy. (中央工業大学校, 1876~1877年度。第1学年, 「一般力学」。Levy 教授)。
- (12) UDC531 — Leçons de Mécanique rationnelle, professées par M. Tisserand, à la Faculté des sciences de Paris, N^o 1 (パリ大学理学部 Tisserand 氏による「理論力学」の講義, 第1冊)。
- (13) UDC531 — 同上第2冊
- (14) UDC531 — 同上第3冊
- (15) UDC531 — Extrait des cours professés par M. M. Lévy, Rouché, Vacquant, à l'École centrale des arts et manufactures de Paris, Cahier N^o 1 (中央工業大学校 Lévy, Rouché, Vacquant 氏による講義の抜き書きノート第1冊)。
- (16) UDC531 — 同上第2冊
- (17) UDC531 — 同上第3冊
- (18) UDC531:62 — Ecole Centrale, Cours de Mécanique appliquée, par M^r. de Comberousse (中央工業大学校 De Comberousse による「応用力学」の講義)。
- (19) UDC532 — Ecole centrale des arts et manufactures. M. Tresca. (中央工業大学校。Tresca 氏の「水理学の」講義)。
- (20) UDC543 — Ecole Centrale, Cours de Chimie Analytique, par M^r. Le Blanc. (中央工業大学校。Le Blanc 氏による「分析化学」の講義)。
- (21) UDC621 — Ecole Centrale. Cours de Construction des Machines, par M. Lecoivre) 中央工業大学校 Lecoivre 氏による「機械工業」の講義)。
- (22) UDC622 — Ecole Centrale. Cours de M. Burat. (中央工業大学校, Burat 氏の「鉱山学に関する」講義)。
- (23) UDC623 — M. de Fréminville (De Fréminville 氏の「軍事技術に関する

講義)。

(24) UDC624/628 — M. Boutillier (Boutillier氏の「土木工学概論」の講義)。

(25) UDC624/628 — Ecole Centrale. Cours de Constructions civiles, par M. Muller (中央工業大学校, Muller氏の「土木工学」の講義)。

(26) UDC625.1 — M. Manton (Manton氏の「鉄道工学」の講義)。

(27) UDC63 — Ecole Centrale. Agriculture. (中央工業大学校, 「農学」の講義)。

(28) UDC668.3 — M. Vincent (Vincent氏の「天然有機物の化学工業の講義」)。

(29) UDC69 — M. Jordan (Jordan氏の「や金学の」講義)。

(30) UDC69 — M. Demimuid (Demimuid氏の「建築構造の」講義)。

以上30冊はどれも、留学中の学生としての古市の受講ノートに違いない。しかし、この一覧表の中の個々のものを見れば、表現のていねいなものと、簡単なものがあり、簡単なものでは、筆記の際に略記方法がいたるところに用いられている。このことは、整理して書き直したものと、生の受講ノートの2種類があることを示すものであろう。

1.2 そのほかの自筆のもの

この類に属するものには次のふたつと、数枚の断片的なものがある。

(1) Cours de Calcul infinitésimal professé à l'Université de Tokio en 1881-82 par K. Fourouitsi (明治13-14年に東京大学で古市が行った微積分学の講義)。

(2) K. Fourouitsi - Notes de mes voyages d'étude (私の見学旅行記)

(3) Notes sur les travaux publics en Europe (ヨーロッパの公共土木事業に関する備忘録)。

(2)の見学旅行記は全体で114ページのものだが、その中で文章の部分が60ページあり、素直なフランス語で書かれていて、ペンの運びは美しい。残りの50ページばかりには何十かの手がきの説明図が出ている。

これは、単に古市が自分の記憶のために書いたものではなく、他人に読ませるためか、旅行報告の講演のために書いたものと推定できるような個所がある。

この旅行記と、(3)の「ヨーロッパの公共土木事業に関する備忘録」とは、古市が西洋の土木事業

を前にしてどのように感じ、また考えたか、ということを知るためには、貴重なものだと
よい。その際に、Vauthier氏(後出)が示した見解に古市がただちに従ったことも多かった
であろう。フランスでの勉強を終えたばかりであったから、それはむしろ当然であろう。この
旅行記の最初の何行かの文章に旅行の目的が述べつくされている。それを次のようにほん訳し
ておこう。「Vauthier氏と私の友人が伴って3人で行ったこの旅行の主目的は、英国の河
川感湖区間(エスチュアリ)における航路の状態を調査することであったが、われわれは、公
共土木事業やそのほかに興味のあるものにはすべて注目を払おうと心がけた」。これは、第1
回の、英国(現在のエールを含む)への旅の記録の最初の文章だが、ベルギーとオランダに行
った第2回の旅行の記録には、その旅行が第1回の旅の続きをなすものだ、としてある。

旅行の日程

- 9月 3日 Parisの朝立ち、夕方Londonに着く。
- 4日 Londonの土木学会を訪問、午後Londonを立って、夕方Liverpoolに着く。
- 5日 LiverpoolとBirkenheadの港を見学
- 6日 Mersey川の感湖区間を見学。午後Liverpoolを立って、夜半にDublinに着く。
- 7日 日曜、ふ頭の見学。
- 8日 新突堤の工事現場を見学、夕方Dublinを立ち、翌朝Glasgowに着く。
- 9日 ふ頭を見学。
- 10日 Clyde川を見学。夕方Glasgowを立ち、夜半前にNewcastleに着く。
- 11日 Tyne川を見学。
- 12日 ひる過ぎNewcastleを立ち、夕方Londonに着く。
- 13日 いくつかのドックを見学。
- 14日 日曜、朝Londonを立ち、夕方Parisにもどり着く。
- 9月25日 Parisを立ち、夜半過ぎにAntwerpen(アントワープ)に着く。
- 26日 Antwerpenの市役所の技師Royers氏を訪問、さらに北ドックを見学。
- 27日 はしけ溜まりおよび建設中の新岸壁を見学。
- 28日 午後Antwerpenを立ち、夕方Vlissingen(Zeeland)に着く。
- 29日 朝Vlissingenを立ち、ひる過ぎDen Haagに着く。Waterstaat(土木局)のWaldorp主任技師を訪問。夕方Den Haagを立ち、夜Amsterdam

に着く。Ijmuiden 運河の主任技師 Dirks (?) 氏を訪問。

30日 Ijmuiden 運河を通過して北海に面する港を見学。

10月 1日 Hooek van Holland を見学。夕方、Den Haag を立ち、夜半過ぎに Bruxelles に着く。

2日 朝、Bruxelles を立ち、ひる過ぎ Dunkerque に着く、港の工を見学。午後、Dunkerque を立ち、夜 Amiens (アミアン) に着く。

3日 朝早く Amiens を立ち、ひる過ぎ Le Havre (ル・アーブル) に着く。ふ頭を見学。

4日 ドックを見学。ひる過ぎ Le Havre を立ち、ほどなく Rouen (ルーアン) に着く。ふ頭を見学、夜 Rouen を立ち、夜半 Paris にもどる。

2. 洋 書

古市文庫の中の第2の部分、つまり洋書、を発行年から察すると、約6割強は古市が留学の間に入手したもの、と推定できる。それ以後のものの中には、特に1910年ごろよりも後のものの中には、寄贈によって古市の蔵書となったものもあると見える。それらの洋書の中から、いろいろな意味で目立つものを求めてみよう。

2.1 <土木技師提要> (Manuel de l'ingénieur des ponts et chaussées)

これは1872年から1880年までの間に、科学技術の本の出版で現在も盛んに活動しているパリのDunod社から出版された、20冊から成る双書であって、古市文庫の中に大部分が含まれている。(古市は恐らく全部を入手していたのだった、と推定することができる。しかし、現在は5冊が欠けている)。

当時のフランスの事情を仮りに現在の日本の事情に例えるとすれば、国家公務員の土木の上級職になるための資格試験を受ける人はこの双書によって勉強する必要があった。あるいは、その資格試験の準備のためにこの双書が作られた、としてもよい。この双書がちょうど古市の留学のときに刊行されたのでいまそれをわれわれが見ることができるのかも知れない。

この双書の各分冊の標題を掲げておく。第1冊第1部代数学・微分学と積分学・解析幾何学、第2部画法幾何・石切り・木構造、第2冊物理学と化学、第3冊地質学と鉱物学、第4冊施工法、第5冊測地学・水準測量・平面測量、(第6・7・8冊は不明)、第9冊道路、(第10・11冊は不明)、第12冊トンネル工事、第13冊鉄道、第14冊建築構造、第15冊水工

学第1部水理学, 第16冊水工学第2部給水, 第17冊水工学第3部気象学・水文学・合理的耕作法, 第18冊農業における水, 第19冊輸送手段としての水: 河川航行と海上航行(第1部河川, 第2部運河, 第3部海港), 第20冊(または別巻)公共土木事業行政辞典。

なお, この双書はA. DEBAUVEの名のもとに作られているが, 各分冊の執筆者の名は明記されていない。

2.2 <公共土木事業百科全書> (Encyclopédie des travaux publics)

これは<百科全書>という名が付いているが, 例えば<岩波全書>のようなものである。(大きさはA5判程度)。

この全書は, 古市が留学を終えて帰国して間もない, 1884年からパリのBaudry社から, 土木総監M^c-C^t. LECHALASの監修のもとに刊行され始めたものである。そして, 監修者自身の著書<河川工学>がこの全書の最初を飾った。(私は, 1960年ごろに中山秀三郎教授が1895年に入手したこの本を東大生産技術研究所の蔵書の中から見いだした。そして, 全書というからにはほかにも何冊かあるはずだ, と思っていた)。

ところで, この全書には第何巻というようなことは書いていないし, またこの全書の全体を紹介する文章も未だ見付けていない。しかし, 古市文庫の中にこの全書に属する次の7冊がある(発行順): (1)M^c-C^t. LECHALAS-河川工学, 1884年, (2)P. GUILLEMAIN-内陸水運: 河川と運河, 第1巻, 1885年, (3)同じく第2巻, 1885年, (4)D. MONNIER-工業電気学, 1889年, (5)F. LAROCHE-臨海工事: 海の現象・港口, 1891年, (6)F. LAROCHE-海岸港, 第1巻, 1893年, (7)同じく第2巻, 1893年。

2.3 <英国における公共事業の制度について> (Ch. de Franqueville - Du régime des travaux publics en Angleterre, en 4 volumes. Paris, Librairie Hachette et Compagnie. 1875.)

前記の見学旅行記の中にも, 英国では公共土木事業の制度がフランスとは大分変わっていて, 事業主体が民間であることが多い, と古市が指摘している。そのために, 古市が特にこの本を読んだのではないだろうか。

2.4 歴史的なできごとに関するもの

- (1) E. Ganguillet and W. R. Kutter - A general formula for the uniform

flow of water in rivers and other channels. New York, John Wiley and Sons. 1889.

これは Rudolph という人から寄贈されたもので、それは Kutter であろう。水理学で有名なカンギレー・クッターの公式は、1869年に雑誌によって発表され、後にこの本によって詳細にされた。正確にはこれはその本(ドイツ語)の英語訳である。

(2) *Compte-rendu détaillé des travaux du Congrès international de l'utilisation des eaux fluviales.* Paris, Imprimerie générale Lahure. 1889.

明治22年7月22日から27日までの間、パリにおいて、<河川の水の利用に関して>国際会議が開催された。この本は、水問題に関する学術的な国際会議として恐らく最初のものだと見られるこの会議の詳細な議事録である。そこには255名の参加者があり、東洋からは中国の1名と日本の古市が出席していた。参加者名簿に、Fourouitsi (Kauy) と記されている。

(3) *International Research Council : Constitutive Assembly, held at Brussels, July 18th to July 28th, 1919.* London, Harrison and Sons. 1920.

現在の日本学術会議は第2次世界戦争の前の学術研究会議に直接につながる、としてよいであろう。その学術研究会議の設置は、直接には、大正8年7月にベルギーの首府で開催されたこの国際会議に結び付く、翌年学術研究会議が設置され、古市は初代の会長に選ばれた。

古市公威文献目録

島崎武雄*

1. 古市公威：「東京湾築港に付て — 工学博士古市公威君演述 —」，1895-8-26，p.584~599；東京市役所：「東京市史稿 港湾編第四」，1926-12-25。〔国会図書館〕
2. 古市公威：「仙台湾築港意見書」，1899-12-24，p.p.67。〔東大土木図書館〕
3. 古市公威・中山秀三郎：「東京築港計画報告書」，1900-1，p.706~755；東京市役所：「東京市史稿港湾編第四」，1926-12-25。〔国会図書館〕
4. 古市公威・中山秀三郎：「東京築港計画附録」，1900-5，p.756~779；東京市役所：「東京市史稿港湾編第四」，1926-12-25。〔国会図書館〕
5. 古市公威・中山秀三郎：「東京築港計画追加報告」，1902-3，p.15~31；東京市役所：「東京市史稿港湾編第五」，1927-1-31。〔国会図書館〕
6. 古市公威：「土木学会第1回総会会長講演」，土木学会誌，1-1，1915-2，p.1~4。〔土木学会図書館〕
7. 古市公威：「土木学会第2回総会会長講演」，土木学会誌，2-1，1916-2，p.1~6〔土木学会図書館〕
8. 「故前会長工学博士男爵古市公威君略歴」，土木学会誌，20-2，1934-2。〔土木学会図書館〕
9. 「古市公威の死去・ — 時報 —」，建築雑誌，48-581，1934-2，p.187。〔国会図書館〕
10. 「故古市男爵の銅像除幕式・ — 時報 —」，土木学会誌，23-7，1937-7，p.737。〔土木学会図書館〕
11. 故古市男爵記念事業会：「古市公威」，1937-7-10，p.p.438。〔土木学会図書館〕
12. 栗原東洋：「技術家古市公威の転回 — 明治31年の或る時 — 資源開発小史 (8)」，資源（総理府資源調査会），1955。〔科学技術庁資源局〕

* (株) I N A 新土木研究所

13. 真田秀吉：『内務省直轄土木工事略史・沖野博士伝』，1959-2-25，p.p.251。
〔土木学会図書館〕
14. 大霞会：『内務省史 第3巻』，p.168~172，第2篇第1部第5章第8節1 古市公威，
1971-6-1。〔土木学会図書館〕
15. 栗原東洋：『印旛沼開発史』，第1部上巻，1972-3-20，p.p.798；第1部下巻，
1973-1-31，p.p.883。〔国会図書館〕
16. 金関義則：「古市公威の偉さ」，みすず（榎みすず書房），(1)1974-6，p.13~24；
(2)1974-7，p.10~19。〔国会図書館〕
17. 井口昌平：『古市文庫への手引き』，(1)全体の姿，1975-6-17，p.p.5；(2)見学旅行
記について，1976-3-17，p.p.2。〔東大生産技術研究所井口研究室〕

古市公威年譜

島崎 武雄

安政 1 (1854)

閏 7.12 (9. 4) 姫路藩士：古市孝の長子として江戸蠣殻町の姫路藩中屋敷に誕生。

明治 2 (1869)

1. - (2. -) 開成所に入学，講習（地理・歴史・物理など）・語学・数学を修め，語学は仏語を選定。

明治 3 (1870)

10. - 大学南校に貢進生として入学。

明治 6 (1873)

4. 10 開成学校に入学。

明治 7 (1874)

5. 7 開成学校を東京開成学校と改称。古市は諸芸学科に在学。



古市公威銅像

(1976. 9. 27撮影)

〔古市公威銅像〕

作：堀進二

銘文（撰）：塩谷 温

（書）：工藤壮平

所在：東京大学構内

銘文は『古市公威』401頁に全文掲載。

明治8(1875)

7. 18 仏国留学のため、横浜を出帆。
9. 1 パリに到着。
9. - エコールモンジュ(エコールサントラルの予備科の高等学校)に入学。

明治9(1876)

7. - エコールサントラル(Ecole Centrale des Arts et Manufactures, 中央工業大学)の入学試験に3番の成績で合格。

明治12(1879)

8. - エコールサントラルを2番の成績で卒業、工学士の学位を受領。
11. - パリ大学理学部に入学。

明治13(1880)

7. - パリ大学を卒業、理学士の学位を受領。
9. 1 パリを出発。
10. 21 横浜に到着。
12. 11 内務省土木局雇に就任。

明治14(1881)

10. 21 東京大学理学部講師を兼任。

明治15(1882)

8. - 豊平川調査。

明治16(1883)

2. - 豊平川改修工事計画案を内務卿に提出。

明治17(1884)

1. - 川名幸子と結婚。
12. 22 新潟県在勤を命ぜらる。信濃川・阿賀川・庄川などの直轄河川改修に従事。

明治19(1886)

5. 1 帝国大学工科大学長に就任。

明治21(1888)

5. 7 工学博士の学位を受領。
9. 1 東京市区改正委員に就任。
11. 14 内務大臣：山県有明の欧州諸国巡回の随行者として出発。

明治 22 (1889)

9. 18 帰国

明治 23 (1890)

6. 14 内務省土木局長に就任

9. 9 貴族院議員に刺選さる。

明治 27 (1894)

6. 22 内務省土木技監に就任。

明治 31 (1898)

7. 19 内務省土木技監・土木局長・帝国大学工科大学長を辞任。

9. — 横浜港港湾計画説明書を大蔵省に提出。

11. 9 逓信次官に就任。

明治 33 (1900)

1. — 東京築港計画報告を中山秀三郎と共同で東京市長に提出。

5. 20 逓信省総務長官兼官房長に就任。

10. 31 逓信省を辞任。

明治 36 (1903)

3. 31 鉄道作業局長官に就任。

12. 28 鉄道作業局を退職，京釜鉄道株式会社総裁に就任。

明治 39 (1906)

6. 30 韓国統監府鉄道管理局長官に就任。

9. 14 帝国学士院会員に刺選さる。

明治 40 (1907)

6. 17 韓国統監府鉄道管理局長官を辞任。

大正 3 (1914)

6. 23 日仏協会理事長に就任。

9. 15 土木学会初代会長に就任。

大正 6 (1917)

6. — 工学会会長に就任。

大正 8 (1919)

12. 27 男爵を授けらる。

大正9(1920)

8. - 東京地下鉄道会社社長に就任。

大正11(1922)

8. - (社)工学会理事長に就任。

大正13(1924)

1. 14 枢密顧問官に就任。

昭和3(1928)

8. - (社)日本動力協会会長に就任。

昭和4(1929)

10. 29~11. 6 万国工業会議を東京で開催。古市は会長に就任。

昭和5(1930)

2. 11 英国土木学会名誉会員に推薦さる。

昭和9(1934)

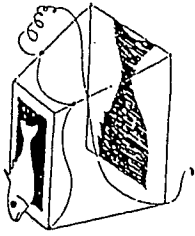
1. 28 東京市渋谷区常磐松の自宅で死去。

昭和12(1937)

6. 5 古市公威銅像除幕式。

〔典拠文献〕

故古市男爵記念事業会：『古市公威』，1937-7-10。



古市公威の偉さ

3

金 関 義 則

昭和四九年は三年おきに開かれる国際科学史会議が初めて日本で催され、科学史家にとって思い出の多い年となった。その年は私も五月の日本科学史学会年会と、八月の国際科学史会議で、古市公威の生涯について報告し、思ったより大きい反響があった。そのとき用意した資料を使って、『みすず』六月号(第一七五号)、七月号(第一七六号)に「古市公威の偉さ」を寄稿したため、科学史に縁遠い人々からも質疑や批判が寄せられ、その度に元気づけられた。そのころまで土木史の研究は甚だ振わず、古市のような古い人物のどこが面白いのかと不思議がられたからである。昭和一二年に故古市男爵記念事業会が刊行した『古市公威』は、古書店で値段を安くつけても売れずに棚ざらしとなっていた。これが段々に姿を消し、ついに極めて入手しにくいものとなり、これに

代わる書物がないせいも、古市について書いてくれ話してくれと頼まれるようになった。しかしながら『古市公威』を繰返し読めば読むほど疑問が出てくるので依頼は全て辞退し、少しずつ解明できたことを日本科学史学会、土木学会などで発表してきた。ただ与えられた時間や字数に制限があって意を尽くせなかったから、補足し整理しなおして叱正を仰ぐこととした。

日本の土木史で最も大きい業蹟を残したのは、フランスに留学しエコール・サントラルを卒業した古市公威と沖野忠雄であった。古市や沖野がいつころから土木工学を志したか、どのようにして土木行政の要職を占めることができたか、本人が率直に語っていないので判りにくく解きにくい問題である。古市も沖野もフランス

留学を強く望んだが、禮儀して土木に携わることは全く保障されていなかったのである。真田泰吉『内務省直轄土木工事略史・沖野博士伝』昭和三四年に、沖野のもらった辞令の写真が載っているが、

物理学為修業仏國留学可致候事
但留学年教滿五年トス
仏國到着ノ月ヨリ年限中学貸渡候事
明治九年六月十九日
文部大輔田中不二麿代理

文部大丞 九鬼隆一

とあるように、物理学修業が留学目的として明記されている。古市のもらった辞令では、諸芸学修業が留学目的とされ、日付が明治八年七月十日となっているほかは、全く同文である。古市も沖野も開成学校の仏語諸芸学科の生徒であったが、明治九年六月に仏語諸芸学科が改編されて仏語物理学科になったため、仏語諸芸学科の生徒は全て仏語物理学科の生徒とされ、明治一年に五名、二一年に七名、一三年に八名が卒業して、仏語物理学科そのものも姿を消してしまふ。もし古市公威、沖野忠雄が選抜されてフランスへ留学しなかったら、明治一一年に、他の五名とともに東京大学理学部物理学科の第一回卒業生となったであろう(東京開成学校と東京医学校が合併し改編されて東京大学になったのは明治一〇年四月である)。

明治三年に古市や沖野が貢進生として大学南校に入学したときは仏語科生徒は七四名、独語科生徒が一七名、英語科生徒が二一九名いた。四年七月に慶應置業が実施され、貢進生制度も廃止された。学制も改変され大学南校は南校と改称されて、生徒を選抜しなおした。先に貢進生として集ったものの半数が姿を消し、新しく貢進生以外から合格したものが加わって合計四四〇名が入学許可となった。南校はさらに五年に第一大学区第一番中学、六年に開成学校、七年に東京開成学校と、めまぐるしく改称されていくが、五年には、将来は仏語教師、独語教師まで揃えられない、すなわちやがて学修は英語だけに限る方針が決定された。仏語科生徒、独語科生徒は英語科に転科することがすすめられ、転科を望まぬ生徒を救済するために仏語諸芸学科、独語鉱山学科を暫定的に設けることになった。それが六年のことで、翌々年には仏語諸芸学科をやめて仏語物理学科を、独語鉱山学科をやめて独語化学科を設けることに変更されたのであった。ところが希望者が物理学科は四三名、化学科は一〇名しかなく、仏語物理学科は設けるが、独語化学科は設けないことに決定した。すなわち四三名の仏語科学生を卒業させるための寿命の短い仏語物理学科ができたが、独語科生徒は全く切りすてられてしまった。四四〇名を選抜したときには、英語科生徒が二分の一、仏語科生徒が四分の一、独語科生徒が四分の一と見とまれていたが、ほとんど半数の生徒は仏語、独語を学んだばかりに、最初の希望が叶えられないこと